



教育委員会より

「多久から発信！SDGs」

「憧れの腰鼓を受け継ぐ」

わたしは、先輩たちが腰鼓をかつこよく踊る姿を見て、ずっと憧れていました。「いつか自分も踊りたい」と思っていたので、5年生になって練習が始まった時は、うれしくてたまりませんでした。

でも、やってみると想像以上に難しく、手と足の動きがばらばらになりました。先輩に教えてもらってもすぐにできず、「やめたい」と思ったこともあり。それでも、わたしたちが受け継がないと伝統が続きません。友達と声をかけ合って練習し、地域の人にも視線や姿勢のコツを教えていただきました。少しずつそろってきて、先輩たちみたいに踊れた時は「やっとできた」ととてもうれしかったです。

文化発表会や秋の収穫で披露する時は、とても緊張しました。でも、みんなで太鼓の音をそろえて踊るうちに落ち着き、最後まで、堂々と踊ることができました。終わった後、「上手だったよ」「かつこよかった」と声をかけてもらい、達成感が胸がいっぱいになりました。

わたしはこれから、5年生に腰鼓を教える立場になります。先輩たちにもしてもらったように、分かりやすくいいねに伝え、あきらめそうな時も支えたいです。腰鼓は、みんなが受け継いでいく大切な伝統だと改めて思いました。

東原彦舎西溪校 6年1組

永石 心華



4 質の高い教育をみんなに

連載

多久市の指定文化財(15)

石製先家君自安先生墓誌

「市重要文化財」
多久町一九七五番地(郷土資料館)

河浪自安は江戸時代多久邑に開設された学校「東原彦舎」の初代教授(今では学校長)となった人物です。自安は寛永12年(1635)に八戸(佐賀市)に生まれ、22歳から医学を学び、27歳で江戸に出て吉田法印の門下となり朱子学を学んでいます。帰郷後は多久三代領主茂矩に外医として仕え、58歳の時に四代領主茂文の命で多久に移り住み、東原彦舎の創設と運営の基礎を築きました。享保4年(1719)に85歳で没し、多久聖廟北の松山墓地に葬られており、その後昭和52年に子孫の依頼で墓地改葬が行われた際、墓碑の下から安山岩製の墓誌が発見されました。板状の蓋と身で構成され、縦65・7cm、横32cmを測り、内側に自安の経歴や功績を記した銘文が陰刻されています。先家君とは儒教において先祖または先達の意味です。墓誌埋納の確認例は国内では20例ほどで、近世墓誌の例としても大変珍しく昭和53年に指定されました。自安の墓は現在、聖光寺(多久町)墓地に嗣子の質斎(二代教授)の墓と共に並び所在します。(教育振興課)



▶石製先家君自安先生墓誌



▶河浪自安の墓(聖光寺)

市民文芸

短歌 《麦の芽短歌会 互選》

- ◆両の手に馳走をさげて来し吾娘よ
母の日と云うは有難き哉
川浪 信子
- ◆元気ですそんな私が入院し
原因わからず涙あふるる
梶原恵美子
- ◆いつの世もかく過ぎ来しか 正論と
いうには遠き政治の支配
尾形 節子
- ◆神様は僕のすべてを見ています
だから自分に嘘はつかない
野崎 隆幸
- ◆短歌の師が護国神社に建立の
戦争戒しむ 碑前に集ふ
浦野 嘉恵

俳句 《大石ひろ女選》

- ◆菜の花の休耕田を埋め尽くす
大谷 和
- ◆境内に影を揺らしぬ藤の花
武富 律子
- ◆草笛の息の続かぬ隣の子
本村 則子
- ◆花吹雪 音符奏でて 散りゆけり
富樫 明美
- ◆城址への徑に踏みゆく花の塵
大石ひろ女

川柳 《多久川柳会 互選》

- ◆花見客 飲み食いのあと 花に酔う
西山 残月
- ◆軽くなる 財布も 樂し子の 帰省
高塚ちかこ
- ◆岸に目を 風を集めて 鯉のぼり
小副川ヨシエ
- ◆茶柱立ち 今日はいい事 ありそう
田中 正春
- ◆片づけた 後から動き出すオモチャ
田代まつこ